特別寄稿

読史会創立百周年記念大会講演によせて

勝山清次

京都大学文学部日本史研究室（国史研究室）を母体とする読史会は昨年二〇一〇年、創立百周年を迎えた。第一回の卒業生が出た一九一〇年一二月、学生有志が日本中世史と古文書学を担当されていた三浦周行教授の指導のもと、史料講読をめざして創設したのが本会の起こりである。初めは私的な輪読会にすぎなかったが、学生・卒業生が増加するにともない、研究発表を主とするようになり、毎月の例会のほかに、秋季に大会を開くなど、学会として活動するようになった。それ以降、当会は京都を拠点とする学会として歩み、戦中・戦後の困難や一時の中断はあったものの、大会の研究発表などを通じて、我が国における日本史研究の発展に貢献してきた。それとともに、長期間にわたり、卒業生の親睦を深める役割も果たしてきた。

この記念すべき年を迎えるにあたり、読史会では講演会を企画し、学生や若い研究者に対して、斬新な発想のもとで大きく問題を捉えてきた伝統をうったえることができ、かつ独自の文化を有する京都、ないしは関西で日本史を研究する意義を語ってもらえるということで、古代史の直木孝次郎と近代史の松尾尊兊の両氏に講演をお願いすることにした。両氏とも古くからの会員であり、関西を拠点にそれぞれの分野で戦後の日本史研究を主導してこられた方々である。

今回の寄稿は、昨年一一月三日、京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールで開催された読史会創立百周年記念大会での講演を掲載するものである。直木氏は一九四〇年代の読史会を中心とした京都の学界状況を活写され、また松尾氏は当会の学風に触れつつ、京都における近代史研究の歩みを語っておられる。いずれも近年、とみに関心が高まっている史学史の貴重な証言であり、挑戦する精神を学び、新たな研究を志す契機となるものと確信している。